

二〇二二年一月八日 摩訶西瓜の会第二十四回句会(会場・都内某零細居酒屋)

参加者(五十音順)

ありんこ、一献、月歩、ごはん、鈴懸、Sora、高蔵、鉄飛、坊主、酔男

「兼題」伊勢海老、今年」(カツコ内は投票者)

ありんこ吟(六点)

伊勢海老の紅より冴えて空の重 (一献、鈴懸、高蔵、坊主)

伊勢海老の逃げ様に似て驚く子

伊勢海老や逃げる術なく背を突かれ

雀ども変わらぬままに今年来る (ごはん、鈴懸)

今年来て諸々さらに繰り越さる

一献吟(三点)

伊勢海老一染之助染太郎

伊勢海老や悪戦苦闘祝酒

重箱の隅なぞ見ない伊勢海老は (Sora)

龍流々と今年の空走る

青空に今年こそはと背伸びする (坊主、酔男)

月歩(十点)

カニカマをこれは伊勢海老曲げぬ母 (Sora、夫人)

犬様よ伊勢海老どこぞかくし芸

伊勢海老の首にひとたち皆はねる (あり、Sora、鈴懸)

今年(こんねん)も重い思いの小銭舞う (一献、ごはん、鈴懸)

座布団に今年占う花が咲く (鉄飛、酔男)

ごはん吟(一点)

岩場影潜む伊勢海老海女狙う

雀二羽今年も同じ朝知らせ (坊主)

ちらちらと今年となりぬ夜明かな

今年こそ何も変わらず今年こそ

振り返る事も無きまま去年今年

鈴懸吟(五点)

伊勢海老は線対称の絢爛さ (夫人)

伊勢海老よお前は少し威張り過ぎ

前を向け今年は今年の風が吹く

「今年こそ飲もう！」空手形何通目 (月歩)

今年また己が業(カルマ)と化かし合い (あり、月歩、鉄飛)

Sora 吟 (二点)

伊勢エビの衣脱がせてニヤニヤリ

伊勢エビにゃ負けぬとザリガニ紅潮す

伊勢エビは値段ほどには美味くない (会長)

今年こそやってほしいなパンまつり (夫人)

「今年こそ」そう言い続け年は行く

高蔵吟 (六点)

伊勢海老に舌はガツカリ市販せち

和正月威張る伊勢海老外国産

今年こそ嗚呼今年こそ今年こそ (月歩)

今年はと唱えることが生きること (あり、月歩、Sora)

今年こそ会おうの年賀古き友 (坊主、酔男)

鉄飛吟 (五点)

見栄切って伊勢海老釜に入りけり (あり、ごはん、鈴懸)

おもむろに狂人伊勢海老丸かじり (月歩)

伊勢海老解体し新婦に投げつける

ガリレオが見抜く「今年」は「公転」と

松過ぎて今年も残り50週 (高蔵)

坊主吟 (十点)

重箱に伊勢海老の背が窮屈に (Sora)

伊勢海老と鯛が睨むや宴会場

台所に今年も変わらず母が居り (ごはん、高蔵、鉄飛、酔男)

今年(こんとし)の行く末見るや辻の易 (一献、鉄飛)

庭先で今年の空気匂いでみる (一献、酔男、会長)

酔男吟 (八点)

山家(やまが)にも伊勢海老ありて酒を飲む (一献、高蔵、坊主)

伊勢海老の髭眺めつつ籠の年 (あり)

伊勢海老と雑煮のほかに用はなし (会長)

これという計もなきまま今年かな (高蔵、鉄飛)

雲が去り月白くなる今年かな (ごはん)

「当季雑詠」

ありんこ吟（四点）

冬風鈴風刺すたびの尖り音や（こはん）

うつら寝も許すまいぞと除夜の鐘

初茜小窓額にし床の中

松取りて町いちだんと静かなり（こはん、鈴懸）

小寒や雲に昇龍見つけたり（鈴懸）

一献吟（九点）

歩道橋遠くに座る冬の富士（坊主、酔男、会長）

ろくでもない朝日を受けて凍え増し

北国や思い思いの冬自慢（鉄飛）

箱の中白菜二玉便りあり（月歩、こはん、夫人）

湖面には飾ることない冬木立（鈴懸、鉄飛）

月歩（五点）

三が日升をかたむけ塩を舐め

「起こすから」車内音消し初日の出

愛犬の頭の上に鏡餅（一献、鉄飛）

初旅は湯の花浮かべ自宅風呂（一献、こはん、高蔵）

年賀状出せぬ相手の声を待つ

こはん吟（五点）

丸・四角味噌いやすまし雑煮談（高蔵、酔男）

表裏手書き賀状の景色かな（高蔵、坊主、会長）

お年玉あつという間に母のもと

歩(ほ)も賀詞もたどたとしげや児(ち)このまま

正月の二日始めは朝寝坊

鈴懸吟（五点）

出初式男度胸のスカイツリー（Sora）

元旦の空気を読めぬ震度4（Sora、会長）

人により美にも厄にも雪景色（一献）

ちゃんちゃんこ丸い背中の子夜更け酒

福寿草毒持つ故の可憐さか（坊主）

Sora 吟（五点）

すきま風独りでつつくジーンギスカン

昂見ゆ筑波風に凍てる空（月歩）

寒昂母を追いかけて父が逝く（月歩、夫人）

小春日や巫女は駄話天満宮（あり、酔男）  
小春日や頑固親父のやんちゃ顔

高蔵吟（二点）

露天湯に白雪舞いし飛驒の朝（月歩）  
初春や餅で押し出す去年糞  
駅伝のスタート観れず寝正月  
お正月なぜか笑える老漫才（Sora）  
10円で願い叶うか初まつで

鉄飛吟（五点）

七草を思案の男のちゃんちゃんこ（酔男）  
誓いとも無縁となりて年明くる（坊主）  
為すべきはみなうつちやつて炬燵出ず  
初詣声ははじけるものと知り（あり）  
熱爛や来し方言えぬことばかり（あり、酔男）

坊主吟（八点）

光差すストーブ越しに壁の染み（月歩、いはん）  
年玉を比べる孫の抜け目なさ（高蔵）  
年賀状定年近い恩師から（鉄飛）  
新年も変わらぬ時報ラジオから（あり、一献、鈴懸）  
その決意松明け前の耐えどころ（鈴懸）

酔男吟（八点）

初大師香のむこうに笑顔あり（Sora、坊主）  
分岐する鉄路の先の枯野かな  
冬茜ふいに鋭きノスタルジー  
初穂料受け取る巫女の息白し（Sora）  
枯木立いよいよ空を広くせり（あり、一献、高蔵、鉄飛、夫人）

「席題」木枯し、飾」

ありんこ吟（九点）

木枯しに髪一本の角となり（鈴懸、鉄飛）

木枯しの行く先に立つ遊び児や（一献、会長）

修羅と化し坂昇りゆく木枯や（月歩、こはん）

月仰ぐ着飾る女性の息白し

輪飾に若返りたる古家かな（一献、鈴懸、鉄飛）

一献吟（三点）

木枯らしに足首までが掴まって（Sora）

一步出て木枯らし宿り喫茶店

木枯らしが飾る襟元はためかし（Sora）

冬の雨飾りじゃないのよ涙は（鉄飛）

成人の飾りが照らす会議室

月歩（五点）

木枯らしを窓から眺めのほほんと

耳を斬る風背負い糸を引く（酔男）

木枯らしが軒のタオルで遊んでる（一献、Sora、夫人）

しめ飾り七日過ぎれば燃える「三」

初競馬飾りの餅に手を合わす（Sora）

こはん吟（十一点）

凧をまといた宿に灯（ひ）ともる（坊主、酔男）

修飾語しきりに並ぶ賀詞（よこと）かな（あり、鉄飛）

凧や体裁繕う時間（とき）もなく（あり、鈴懸、坊主）

各々に丁度釣り合つ飾かな（鈴懸、高蔵、鉄飛）

飾り気の失せた食卓七草粥（Sora）

鈴懸吟（二点）

木枯らしを引き裂き楢円球児跳ぶ

痩せ猫の木枯らし耐える肩胛骨（あり）

お飾りを捌く地回り革ジャンパー

休診日満艦飾にケツト干し

着飾りの締めの上のシヨールの水つばさ（月歩）

Sora 吟（七点）

木枯らしに負けじと目指す赤ちようちん（高蔵）

木枯らしやチャンバラごっこにはしゃぐ子ら

凧や漁師煙草で暖を取る（一献、月歩、高蔵）

電飾の枯れ木賑わす旧市街（一献、ごはん、坊主）  
しめ飾り身を焼き旨い餅を焼く

高蔵吟（四点）

木枯しのつとめて映える富士姿（月歩、酔男、会長）  
木枯しに葉落ちし枝に鳥集う（坊主）  
木枯し夜窓ガタつくも高いびき  
「さようなら」ここに木枯し吹きすさぶ  
マイカーにお飾りつけるは大衆車

鉄飛吟（六点）

木枯しに決意も鈍り二度寝かな（坊主、夫人）  
木枯しやのど漬さんと浪曲師（ごはん）  
木枯しや旅芸人に苦楽あり（あり）  
気は心ともいうごとく飾り餅（あり）  
火の気なき仮設に小さき飾あり（高蔵）

坊主吟（六点）

木枯しが刺す頬あかい通学路（夫人）  
木枯しの吹き抜ける辻道祖神（酔男）  
新年に歳暮の洋酒飾りたり  
トタン鳴りお飾り揺れる町工場（月歩、酔男）  
松とれて飾りの残る田舎小屋（ごはん、高蔵）

酔男吟（三点）

木枯しの関東平野を吹きわたる（ごはん）  
凧に糸もちぎれんばかり凧の舞う（会長）  
しなびたる飾りみかんに夕映えす  
輪飾りに勇んで漁夫ら海へ出る（鈴懸）  
千葉産のめでたき色や飾海老